



龍 馬 通 信

No. 69

2023 年 9 月号

白露～秋分の候

秋刀魚と「ひやおろし」

灼熱の太陽

「つくづく惜しい」と夏を惜しみながら
ツクツクボウシは いつの間にか消えた
あっという間に 虫時雨
短い命 今日をせんとど 鳴き暮す

生命の興隆は 幕を閉じ

作物は実りの秋を迎える

秋の魚の代表格は「秋刀魚（さんま）」

不漁が続く 今年も立派な高級魚

滴り落ちる脂が香ばしい白いを放つ

焦げ目をつける 焼き加減

大根おろしにポン酢を添える

9月の声を聴くと

日本酒好きの呑兵衛 気もそぞろ

寒仕込みの酒が 春先には新酒となり

ここで火入れをして貯蔵

ひんやりとした酒蔵で

ひっそりとひと夏を過ごす

熟成した新酒に、あえて火入れをせずに出荷

これが「ひやおろし」

蔵出しの味や香りを堪能する



残暑の残る日中 とはいえ

早朝の空気は澄んで 冷気を含む

空気中の水蒸気が 冷えた草木に触れて
露を結ぶ

緑の葉っぱの上を ころころと転がって
葉先からポタリと落ちる

太陽の光があたって きらり

歌人は 白露を「玉（宝石）」のようだと詠んだ

暑さと涼しさが交錯する季節

季節感を無くした ブドウやナシや柿も

秋色の空気の中で さらに美味となる

秋を愛する人は 心清き人

かどうかは別にして

私は秋の爽やかさが好きだ

春の様に 爛漫ではなく

夏の様に 激しくなく

冬の様に 厳しくない

心地よい 初秋の季節に

過去を想い 未来を語る

これもまた 人生の喜び





播州日誌

エブゲニー・プリコジンの死

2023. 8. 23 ロシアの民間軍事会社ワグネルの創始者、最高司令官プリコジンが死亡した。ワグネルの幹部多数が搭乗した小型ジェット機は、モスクワからサンクトペテルブルクに向かう途中トベリ州上空で空中爆発を起こし墜落した。機内に仕掛けられた爆発物によるものと言われている。搭乗していた 10 人全員の死亡が確認されその後 DNA 鑑定によりプリコジンその人の死亡と確認された。ロシア当局は情報機関の関与を否定しているが、世界中の目は明らかに「暗殺」であり、情報機関あるいはプーチン大統領の関与さへ観測されている。

ワグネルによる 6 月 23 日の武装反乱により、「裏切り者」のレッテルを貼られたプリコジンの粛清は予想されたことであり「公開処刑」との見方もある。英雄から裏切り者へ。過去のプラスと裏切り者のマイナスが相半ばして、それでもロシア各地で追悼の声が上がっているという。

日本人には理解しがたいことであるがプーチン大統領は自分の政敵をことごとく排除してきている。彼の元情報機関員の履歴は事件のたびにクローズアップされている。大統領の暗殺命令が今でもまかり通っている事実に暗澹たる思いがするのは私だけだろうか。

私は民間軍事会社の存在すら許しがたいものであると思っている。億単位の高い報酬さえもらえれば平気で人を殺す殺人集団。ワグネルのどこに正義があるのか。多額の国家予算を配分され、正規軍並みの兵力を保持したワグネルの弱体化は、プリコジンはじめ幹部の多くが死亡することで確実なものとなった。傭兵（義勇軍とは違う）制度が世界中に存在する限り戦争はなくなる。彼らは業として戦争を請け負っているのだ。2 万 5 千ともいわれるワグネルの兵士たちの運命はどうなるのだろう。その動向によってはウクライナやアフリカ各地の紛争地帯の戦争が長期化することになる。国連にあまり期待はできないが、民間軍事会社や傭兵制度の撲滅に有効な手段を講じなければならない。彼らに正義はなく愛国心（祖国を守る）もない。多くは囚人たちであり、ウクライナ戦争での戦争犯罪の多くは彼らの手によるものと思われる。

墜落の数十秒間、彼は何を思っただろうか。地獄の業火に焼き尽くされた遺体は、利権をむさぼり悪魔の手先となった彼の欲望の残骸だろうか。プーチン大統領はこの事件を「悲劇」と表明したが、騙し合い裏切り合いのはての「悲喜劇」と私は思う。

もちろん、追悼の気持ちなど、一片のかけらもない。

2023. 8. 27



第5回 社労士 野口 亮 がゆく

施設の会議室。面談するのは事務長と私。担当に促されて入ってきた A さんは顔面蒼白。うなだれて入室してきた。これは大変だというのが第一印象。簡単な挨拶の後、事務長がゆっくりと話し始める。介護の仕方が悪いと上司から叱責され、それがトラウマとなり適応障害を発症した経緯を確認。私から介護施設での利用者対応はチームワークですることであり、だれか一人が悪いという問題ではなく、チーム内で話し合って助けあってやっていけばいいのではないかと話しかけた。事務長は、注意をした上司も反省して A さんの復帰を待っているよと励ました。同じような話を繰り返して、1 時間余り。A さんは段々と心を開いてくれ、口を開いてくれた。苦しかった思いを吐き出すように彼は話した。上司の叱責の言葉

が耳から離れず、次第に不眠症になり、抗うつ剤や睡眠薬を服用するうち、その副作用か次第に活力がなくなり、心が萎え部屋に閉じこもるようになってしまったこと。誰とも会いたくなくなってしまったとのこと。

適応障害は、障害のきっかけとなった事件を乗り越えた時、問題（トラウマ）は消去され、仕事に適応できるようになる。要するに心の置き場所の問題だ。とにかく短時間でよいから職場に復帰し、徐々に勤務時間を長くしてゆけばよい。誰も A さんの復帰を嫌がっている人はいない。むしろ皆が A さんの帰りを待っているんだよ。事務長と私は心を込めて A さんを励ました。A さんは目に一杯に涙を浮かべて、うんうんとうなずいた。

最終的に来週から職場に復帰すること。半日勤務とすること。何事も上司や事務長に相談することなど、復帰に向けた段取りを決めた。

会議室を出て駐車場で車に乗って出発しようとした時、駆け寄ってきた A さんが深々と頭を下げ「本日はありがとうございました。先生の言葉に励まされました。来週から仕事に復帰します」と笑顔で言ってくれた。これでいい、私の不安は確信に変わった。

秋の夕暮れは早い。釣瓶落としの落日。空は赤く赤く、燃えていた。



創作 ショートストーリー 兄弟げんか

土佐に住み着いた妖怪「しば天」。今日ものんびりと水浴びなどして過ごしていた。昼下がり、商家の旦那さんといった風情の男が訪ねてきた。「しば天さまですか」「さまとよばれるほどのものじゃないが・・・」「おらしば天よ」「今日は折り入ってお願いがあって・・・」「あゝ 何でも相談に乗るぜよ。世のため人の為になる事やったら」

「うちに双子の兄弟がおりまして、上が太郎吉、下が次郎吉・・・」

「うん わかりやすいのう、それでどうした」

「小さい時から兄弟仲が悪く、寝ても覚めても、寄ると触ると兄弟げんか。最後は殴るけるの暴力沙汰。生傷が絶えません」

「年もそろそろ大人の年、どうか仲の良い兄弟にしちゃって欲しいがです。」

「う〜んわかった。ほなら明日ここによこしてくれんろうか」

翌日、くだんの兄弟、口げんかしながらのご登場。まずはしば天が一喝。

「やかましい、喧嘩ばかりしゅう兄弟とはお前らのことか」

「何、しば天がなんぼのもんぜよ」「たかが河童のくせに池におぼれて死んでしまえ」

「まあそうも言うなや、あんちゃん相撲取ろ とろうちや」「わしが負けたら一両」

一両と言っても木の葉っぱ。

最初は兄が続いて弟が、一番二番三番・・・。何しろ河童の身体はヌルヌル・すべすべ

真っ赤な顔で勝負を挑むが決着がつかない。十番二十番・・・。

そこでしば天「もう面倒じゃ、兄弟そろってかかってこい」と挑発。

なにくそとこの兄弟、二人がかりでしば天を責める。しば天は頃合いを見て大きくひっくり返し大げさに負けたふり。「わかったか、兄弟げんかばかりしちよらんと、二人力を合わせれば負ける勝負も勝つことになる。」「親を泣かせたらいかんぜよ」「兄弟仲よく商売に励みや」。はたと気が付いた兄弟、一両ずつをお土産に店に帰って行った。

その後この兄弟は仲良く商売に励み、目薬を創薬して、これが大当たり。薬問屋太郎次郎兄弟屋という屋号で、財を成したと・・・・。

「よかった、よかった」「まっこと、よかった」

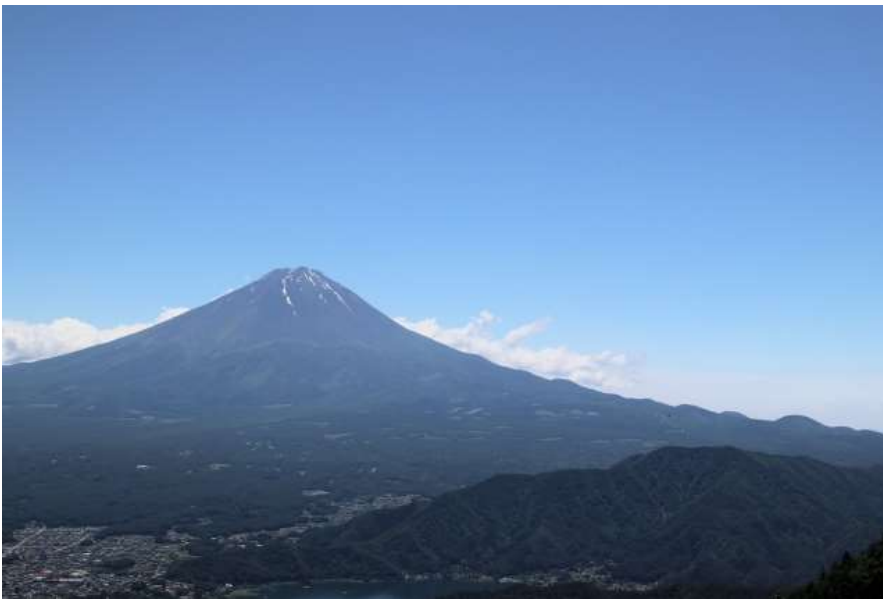


～南国土佐を後にして～

第 14 回 「三島編」

一人暮らしを謳歌

大阪から新幹線に乗り、電車を乗り継いで静岡県三島市についたのはもう夕方だった。大きな建物であったが、三畳一間の小さな部屋。布団をしまう箱状のものが、どおんと場所を占めていた。着いた日早々チッキが遅れて布団が届かず、下宿のおばさんから布団を借りる破目に。カーテンもなくどうしたらいいのか思案投げ首。もうどうでもいいやと納得して借りた布団にくるまって横になる。寂しさや不安が押し寄せてきて、なかなか寝付けない。自然に涙があふれてきて、あわてて布団で顔を覆う。初めての一人暮らし、初めての夜。窓から月の光が差し込んで消灯していても意外と明るい。父母や兄弟姉妹、YT さんや友人たちの顔を思い浮かべながら、やがて昼間の疲れからか寝入ってしまった。



三島市の市街地、国鉄三島駅から少し離れた田園地帯に下宿はあった。昔からの農家、と言ってもお父さんはどこかの役所勤め、お母さん一人で農業をしながら下宿全部を仕切っていた。15 人ほどの下宿生。今考えればお母さんは大変な人だった。何から何まで、朝から晩まで休むことなく働いていた。1 万円～2 万円ぐらいの下宿代で、15 人分の朝晩の賄いと洗濯そして入浴の世話まで、大車輪の働きぶりであった。

学校（日本大学三島分校）は下宿から歩いて 10 分ほどのところにあった。下

宿からも学校からも晴れた日には美しい富士山を見ることができた。抜群のロケーションだった。

15 人の愉快的仲間たちのおかげで、あっという間に打ち解けた。毎晩三々五々誰かの部屋に集まって、お国自慢や彼女のこと、親の職業、兄弟姉妹のこと。話題の尽きることがなく、いつの間にか朝になっていたことも。1 か月ほどである程度自主的に下宿のルールができていった。例えば必ず各部屋に責任をもって鍵をかけること。何かあったときに人を疑うことのないようにとの考え。洗濯、入浴の順番など。

窓から身を乗り出せば富士山の雄姿が見えた。しかし本当にきれいに見えるのは季節にもよるが 1 か月に 3 日～4 日ぐらい。後は雲がその姿を隠していた。順調に一人暮らしが続いた。

時間は余るぐらいあったに出 YT さんに毎日手紙を書いた。遅れ遅れに返事が来たが、3 日起きぐらいに届く小包のような手紙の束にいくらか閉口していたようで「眠い、眠い」が目立っていた。学生と社会人、いつの間にか小さな亀裂が生まれていてもおかしくなかった。彼女は昼間自動車の販売会社に勤めていた。

困ったことに家からの送金が遅れがちで、お母さんにいつも謝っていた。「いいよ、いいよ。そのうち届くでしょ」といつも猶予してくれた。玄関わきに赤い公衆電話が 1 台置いてあった。10 円玉を 20 枚ほど用意して電話をかける。電話口の母は何かこちらの様子を聞こうとするが、そんな暇はない。どんどん 10 円玉が落ちていく。「お金送って」「頼む早めに」これだけ言うのが精一杯。苦学生の見本のようなものだ。

分校の掲示板に夏のアルバイト情報があって、隣町の沼津市の西武デパートのビヤホールの仕事があった。一応試験（面接）にも合格して、6 月下旬からビヤホールのウェイターをやることになった。